

前漢 1260^p 同文 562^p 同文 778^p
 又 1111 562^p 福建 562^p 同文 2397^p
 562^p 599^p 616^p 同文 364^p 615^p

郡に属してゐた。

閩越地域の激動の歴史
 閩越（今の福建省）を中心とする一帯の目
 まぐる「いばかりの歴史的变化について、
 その概要を見ておくことにしよう。（以下第164回「吳・閩越」
 秦は、中国を統一した時、福建地方に「閩
 中郡」を置いた。
 ・「一かゝ、実際には、東冶（いまの閩侯県）
 付近を都とする閩越王がいた。（「東洋史辞
 典」創元新社へ閩越。岩波文庫し四三七
 の、四四頁、注五参照。第六章へ閩中郡」の
 項において既述）
 前漢（前二〇二〜後八）の初め、漢は、こ
 れを認めて「閩越国」と称した。（「東洋史
 辞典」創元新社へ閩越へ福建参照）
 ところが前漢第七代の武帝（在位前一四一〜前
 八七）は、南越征伐に次いで、閩越国を滅ぼ
 した。閩越の地は、中国の治政下に置かれた
 （「東洋史辞典」創元新社へ福建参照）
 後漢時代（二五〜二二〇）の東冶は、会稽

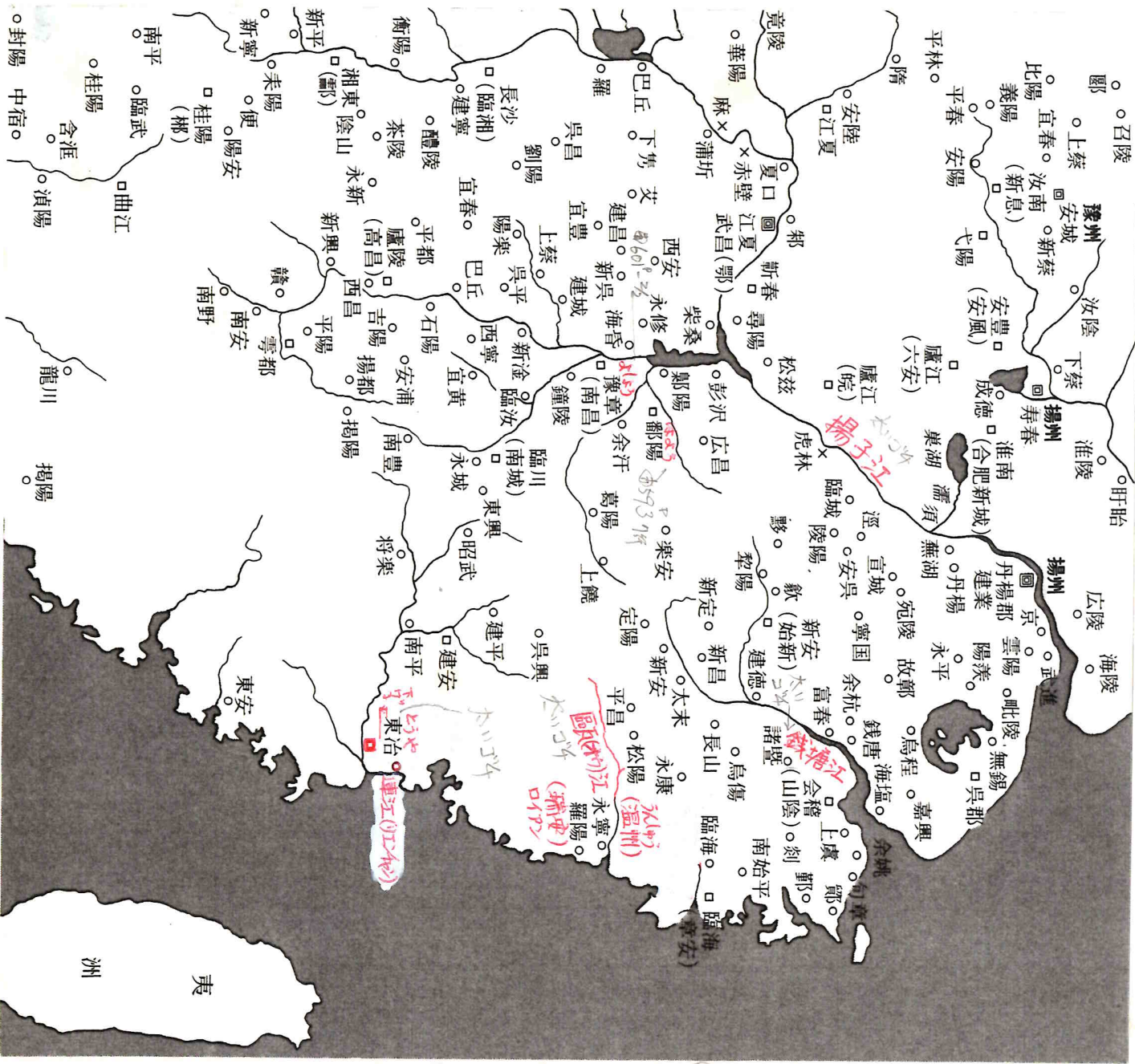
⑤ 744° 1' 1"
 ⑥ 615°
 ⑦ 1440'
 ⑧ 1827'

地方無限
定法をなす

あゆむを
懐
⑤ 591
- 1/2
499

右頁に限定一杯大主に掲載下さい。(枠不要)

海を白くして水色は!



590P-2/5

1324 1404 第164図 呉・閩越を中心とする地図
『三国志』Ⅲ、世界古典文学全集、24C、筑摩書房、末尾の「呉書地図」や『世界百科事典』世界地図・日本地図、平凡社、31~33頁参照。

第160図 春秋時代 540-1/2

5414-1/3

143 白沢 平沢 33頁 3/20 2/2 台湾が必要で

コクヨ ケー20 20×20

（はとろ）
初級 1124 234頁「会稽郡地図」
⑤590P/5末 三国志Ⅱ-72P

590P-4/5

東洋大行135 後漢 25~220 孫策伝 三〇五Ⅱ(峯)15P
大宅 三国時代 220年魏の東に始り、280年晋の統一まで

江省の会稽山丘傍に置いて、東冶城を陥落
させた。そして孫策は、自ら会稽太守を兼
任した。
という。（「三国志」Ⅱ世界古典文学全集、
筑摩書房、一八頁へ呉書、孫策伝参照）
こういふわけで、東冶は、孫策へ三国の呉の
初代皇帝となる孫権の兄の支配下に置かれた。
呉・蜀の三年後の二二〇年に後漢が滅亡して魏。
後漢が滅亡して四〇年後の永安三年（二六
〇）、呉は、
「会稽南部を建安郡とした」
という。
尚、建安郡は、東冶一帯の地のことである。
（「三国志」Ⅱ世界古典文学全集、筑摩書房、
七五頁へ孫休伝）、および三二頁・六九頁の
地図参照）
つまり、（前漢第七代武帝（在位前141~前87）頃）
「東冶は、三国時代永安三年（二六〇年）ま
での間、会稽郡に属していた」

といえそうであるや
 尚、よく知られている通り、倭国の女王卑彌呼は
 三国時代の二三九年来魏国へ朝貢したのだった。
 (「岩波文庫」四三七〇、四九頁、注一参照)
 すなわち、
 へ二三九年当時、かつての「閩越国」(東冶あ
 たりを都とした国)の地は「――」呉国(二二二
 二六〇)の「会稽郡」に属していた
 ということが理解される。
 国そこで、二三九年前後の頃、
 へ「太伯の後」と自称する倭人達は、現実
 の呉国の行政区画に従って、故郷の地「閩越
 の東冶」を、
 「会稽の東冶」と呼ん
 だ
 と推察される。
 ●魏志倭人伝には、
 「其の道里を計るに、當に会稽の東冶の東
 に在るべし」と記されている。
 第六卷へ倭人の祖先は
 太伯が「その水とも夏后少康が」の項において

591^p - 1/3

あかたな
慌 1/29⁹

⑤590⁹ - 1/4 147 (目まぐり3回)

トV

(既述)

*もつともあえていえば、
へ倭人達は日閩越の東冶と云ったにもか

か知らず、
また、
魏略の編者、
そのを聞いた中国人

の編者、
も、
後代に筆写した者、
か、
日会

稽の東冶に改めた

という可能性もあろう。

トル
ともあれこのように、
閩越地方(福建省)

の歴史の変遷は、
実に慌しい。

(*)

前漢 閩越王 590^{p-1/4} 中程
 567^{p-1/5} 1549
 591^{p-2/3}
 590^{p-1/4} 中程

同 567^{p-1/2}
 漢は越王句踐の子孫に
 ある閩越王無諸
 590^{p-1/4} 中程
 590^{p-1/4}

列伝 前漢 (初代劉邦) の五年条には、大略
 こう記されてゐる。
 漢は、越王句踐の後裔である閩越王無諸
 を、秦の時代の閩中の故地の王とし、東
 冶に都させた。
 とある。
 第六卷 倭人の祖先は、太伯か
 ず、夏后少康の項において既述
 つまり、口史記によれば、
 へ前漢の当初当時、閩越国の東冶に都を置
 いて統治した無諸は、
 越王句踐の後裔

王の子孫が、閩越の東冶の地に居住して、
 へ前漢 (前二〇二^{後ハ}) の当初当時、吳
 と明確に述べている文献は無いようだ。
 史記に東越

可能性前頁8行
「とはいえ」 いや前頁10行
⑤590⁰-2/4 それと前頁17行

安太、
素朴に

591^P-3/3

であって、吳王の子孫ではない
ということになる。
■「か」はなはだ強引な感もあるが
●倭人が自ら「~~太伯~~」を「太伯の後」と言ったそ
の言葉の方が真実なのであって、
●司馬遷が著述した「史記」のこの箇所には
誤りがあるのだろう
と思われる。
■では「~~司馬遷~~」の「史記」の記述が正確で
ないとするれば、何故、そんな間違いが生じて
しまったのだろうか。
(1) 日 閔越の越という字にまどわされて、こ
く単に「閔越王無諸は、越王句踐の子孫に違いな
い」と思いついてしまったのかも知れない。
(2) よくあることながら誤った資料を孫引きしてしまっ
た可能性もある。
↑↑だが、そうした詳細についてはいう

史記下 204P

66P-2/3
更にヤヤシ

武帝の頃 590P-1/4 漢書 59P 東漢 13P
史記 元 949P
東漢 29P 592
後漢 25~220P
では 10

596P 5P 漢初
590P 1/4 漢初
561P-9/10 16P 漢初
594P 1/2 漢初
13P

まで本なく ~~分~~ 分らない。
■我田引水のそーりをまぬかれないもの
この物語では、
①前漢の初期当時、閩越の東冶に都を置いた
閩越王無諸は、
越王句踐の後裔でな
く、呉王の子孫だったのであろう。
②一方、越の東海王揺は、東甌王、閩越王、
ともいう。は、越王句踐（勾踐）の後
裔だったのだらう。
と仮定して、話を進めてゆきたい。
（*）
前漢半ばに著された「史記」
「東越列伝」は、および後漢初期の八二年
ごろ編纂された。漢書は、嚴助・朱買臣伝
を見てもよい。
秦から漢初にかけての頃の閩越あたりの様子が、
分や、こーいものの「克明」に記されている。
なお、東冶に都した閩越王（無諸・鄧
ら）の行動に注目したい。
「史記」は、東越列伝には、こーい記述がある。
閩越王無諸と、越の東海王揺とは、その先

⑤ 599^P - 1/2 11 ~ 12 斤
前反 1 斤 ~

リ、国王の位が空虚^{くうきよ}に力^{ちから}漢^{かん}畫^がの教^{きょう}敗^{ぱい}、
 彩^{さい}實^{じつ}直^{ちく}佐^さの後^ご文^{ぶん}から借^か用^{よう}となつてゐるの
 で、――閼^{かん}越^{えつ}王^{わう}の絶^たえた世^よ嗣^しを立ててや
 ったはどうでようか、
 と武帝^{ぶいてい}に提^{てい}言^{げん}されたようだが、
 へそれでは何^{なに}故^げ、閼^{かん}越^{えつ}では、自^{みづか}ら国^{こく}王^{わう}を定^{さだ}
 め得^えなかつたのだらうか、
 と不^ふ審^{しん}に思^{おも}われる。
 詳^{しょう}らかでないものの、前^{ぜん}一三八年、閼^{かん}越^{えつ}が
 東^{とう}甌^{おう}を包^{ほう}圍^いして降^{こう}服^{ふく}寸^{すん}前^{ぜん}の状^{じやう}況^{きやう}に迫^おり込^こんだ
 時^{とき}、反^{はん}乱^{らん}が起^おこり、――閼^{かん}越^{えつ}国^{こく}の
 国^{こく}王^{わう}の位^ゐを継^{つぎ}ぐのに必要^{ひつよう}な表^{ひょう}物^{ぶつ}（――るし
 の物^{もの}）とさへていた。天^{あま}羽^は羽^は矢^や（複^{ふく}数^{すう}本^{ほん}）と
 矢^や（矢^やを入^いれ携^け帯^{たい}する容^{よう}器^き）とを持^も
 ち、王子^{おうじ}（物^{もの}部^ぶ氏^しの遠^と祖^そ饒^{にぎは}速^{はや}日^{ひの}命^{みこと}）が東^{とう}海^{かい}
 の島^{しま}（九^く州^{しゅう}の有^{あり}明^{めい}海^{かい}沿^{えん}岸^{がん}部^ぶか）へ降^{くだ}つてゐたの
 かも知^しれな
 い。神^{しん}武^ぶ即^{じく}位^ゐ前^{ぜん}紀^き。他^た参^{さん}照^{しやう}（^{聖^{せい}武^ぶの}命^{みこと}）
 詳細^{しやうさい}については、第^{だい}七^{しち}章^{しやう}へ饒^{にぎは}速^{はや}日^{ひの}命^{みこと}の項^{こう}に
 おいて述^のべたい。
 ともあれそのような理^り由^{ゆう}によつて、

史記 205上 漢 同又 598 2/13 601 P-1/2

地 武帝 在位前 141 ~ 前 87

へ 閼越^{かんえつ}国^{こく}では、国王^{こおう}の位^{くらう}が空虚^{くうきよ}とな^なり
 自^{みづか}ら新^{あら}たな国王^{こおう}を定^{さだ}めることか出^で来^き
 なかつたのだらうと
 想像^{さうぞう}される。

*

か、漢^{かん}の武帝^{みんてい}から世^よ嗣^しを立^たててお^おう^うら^らた^たの
 か、それと閼越^{かんえつ}国^{こく}が独^{どく}自^じに王^{おう}を擁^{よう}立^{りゅう}したの

か、とい^いつた点^{てん}につ^ついてはよく分^わからな^ない^いか
 閼越^{かんえつ}軍^{ぐん}が突^{とつ}然^{ぜん}兵^{へい}を引^ひいて去^さった時^{とき}

へ 前^{ぜん}一^{いつ}三^{さん}八^{はち}頃^{ころ}か^から^らほ^ほ三^{さん}年^{ねん}後^ごの前^{ぜん}一^{いつ}三^{さん}五^ご年^{ねん}
 頃^{ころ}にはすでに閼越^{かんえつ}王^{おう}郢^{えい}が王^{おう}位^{くらう}を継^ついで

た^たと解^{かい}さ^され^れる。

史記^{しき}に東越^{とうえつ}列伝^{れつでん}の建元^{けんげん}六年^{ごくにん}へ前^{ぜん}一^{いつ}三^{さん}

五^ご条^{じょう}に、こ^こう記^きさ^され^れて^てい^いる。

小本 110P

「土」⑤ 588°
⑤ 617°

601° - 2/2
同⑥ 603° - 5分
大木 504° 都陽
⑤ 593° 7分
同⑥ 602° - 3分
南越 1618°
秦滅前 206年
135
111
24

前漢
「建元六年（前一三五）にいたって、閩越
が南越（漢代の国名。前二〇七〜前一一一
今の広東・広西地方にあり、二四年後の前一一一
年、漢の武帝により滅ぼされる）を撃つた」
漢越は、天子（漢の武帝）との約束を守り、
勝手に天子に攻撃してはならないと考え、天子に
報告した。天子は、大行（官名）王恢を豫章（江西省
鄱陽湖南岸）から東へ向かって出撃させると
とにも、大農（官名）韓安国を会稽から南へ
向かって進軍させ、二人を將軍とした。
漢の王恢の軍が大庾嶺（江西諸）を越える
以前に、閩越王郢は兵を発し、武夷山中の
險難の地によって防いだし
という。『史記』下平八社、野口
定男訳、二〇五頁参照）
■察するところ、
へ前一三五年に、閩越王郢が、南越を撃つ
たのだらう』
と思われろ。

木

⑤ 605°
12分〜16分

記し・「漢書」参照
ただ、この物語では、

ともあれ、
閼越王が弟に殺され、その弟も殺され、
という極めてよく似た事件が二度あった
のだろう。
と推察される。

*
では、建元六年（前一三五）から以降の複
雑に込み入った閼越地方の様子を、
想像を交えながら、もう少し詳しく見てみよう。

う。（一部重複）
史記 東越列伝、および漢書 東越列伝
嚴助・朱買臣伝から、次のような経過が
たどれるようだ。

建元六年（前一三五）、閼越は兵を起し、
南越（広東省・広西省）を攻めた。
南越は天子（漢の武帝）との約束を守り、
反撃してはならないと考え、天子に報告した。
漢の武帝は、その心掛けを殊勝だと見て、
南越のために大がかりな援軍を出した。（史

けめ 除い 601?

いさ 諫める 105 漢 61' 右エ

中国人 漢宮 60' 上左
HV 淮南王の劉安 全上上右

史記 205 上P
(史下) 601-2/2 同テ
618

魏延 670.5 年 方中
610' 前 127 年の
602' 2/2 64' 甲寅年

599' 同文 10' 所

HV 603P

HV 淮南王の劉安 全上上右

施し 招き寄せるようになさいませ。

中国に住まわせたいと思ひ召すならば、恩を

陛下がもし、この民を味方に就け、彼らを

またのこと。

某は死罪となり、その民は宙に浮いたま

「世間の噂によれば、閩越王は弟某に殺さ

※もとも少々奇妙なことに劉安は、前一二三五年に、

言を尽して武帝を諫めた。

淮南王の劉安（劉邦の孫）は、上奏し、万

政め落せる筈はなかつた。

入足を踏み入れ、攻めたりみたりと、急に

閩越を攻撃しようとしたのだった。

閩越の軍勢が、地勢險峻、閩越の地

と、つまり、武帝の軍は、西方および北方から

とうとした。「史記」参照

稽から出撃させ、二人を将軍として閩越を撃

都陽（湖南岸）から大農（官名）韓安国を会

武帝は、大行（官名）王恢を豫章（江西省

と考へてみたい。

前一二七年度の甲寅年」のことだったのであろう

軍を發したのには、前一二三五年の数年後

へ漢の武帝が閩越王郢を討伐するため大

史記(漢)下205
75

史記205%上
同601°-2/2 114

史記205%上
同601°-2/2 同 604P

603P-1/2
547

漢書、後漢書、三國志列伝 63°

閩王は、虎狼のべで百越の富を貪ろうとしており、順序を弁えず、朕が詔命を聞こうとしない。
このまま放置すれば、いざ取返しのつかない事態になろう。今のうちにこそ閩越を討つべきではないか。
と思うのだった。
劉安が告げた曰天子の意向は参考。
閩越に對しての積極的な侵略策を選んだ。
先述のとおり。
大行王恢は豫章(江西省)から、大農韓安(会稽)から出撃した。
史記に東越列傳。
西方および北方から、漢の大軍が、ローンを閩越を目指して進んでいった。
一方、閩越王郢は、漢軍が西方の大庾山嶺(江西省)を越える前に、兵を突し、武夷山中の險難の地によつて防いだ。
史記に閩越王郢の弟の餘善は、西方から躍り寄つ

トル

841°

2148°

てくる漢の大軍勢を眼下に目にした時、早く
 も血の気を失った。
 ・西の方角、見はるかす限りの山麓には、漢
 軍の軍旗が翻り、夥しいばかりの兵達がひい
 めき合っ
 へ二人な大軍団が押し寄せたのでは、
 関越の地がいくら陰阻だとはいえ、ひとたま
 りもあるまい
 と思われた。
 ・関越の兵等は、震え上がり、顔面蒼白、す
 っかり怯えまっ
 同姓血縁集団と謀って、こう言った。
 「わが王(郢)は、ほいままに兵を發し
 て南越を撃ち、漢の天子の指令を全く聞かな
 かつた。
 それ故、天子の兵がわが国の誅討に向かっ
 ているのだ。
 それにても、漢軍は多くて手強い。
 たとえいま、幸い勝ち得たとしても、今後



史元 (F) 205° 上中
 ⑦ 777° - 2/2
 ⑧ 780° - 2/2

606^P

同 由 $620^{\circ}-\frac{3}{2}$

ますます多く来襲し、ついにわが国を滅ぼす結果になるだろう。
 天子に謝罪したらどうか。
 天子が聴き入れて討伐をやめてくれたなら、わが国はもととのままに保たれるだろう。
 その時初めて力の限り戦い、勝てなければ海
 上へ逃さずればよいではないか。
 皆が賛同して言った。

前頁へ
→→→

史記下205 左上

508 757 1442

は 馳す 1986
改訂

漢書後 63 下 89
607P
1739 618 1425

大行王恢は言った。

われわれが遠征してきたのは、閩越王を

誅殺するためである。ところが、いま王の

頭が届き、謝罪してきて、戦わずして閩越は

陥落した。これより大きい勝利はないし

そこで大行王恢は通宜兵をとめ、会

稽から南下中の大農韓安国の軍へ連絡するとともに

天子への使者を遣わした。使者は閩越王の頭を奉じて

馬を馳せ、天子に報告した。(史記(東越列伝)参照)

漢の武帝は、

「朕が軍は罰するためのものであって、戦

うためのものではない。わざわざ人民を疲

させ、士卒を苦しめることはない。軍勢す

て集まらぬさきに、天のなせるわざにて、閩

王(郢)は落命した。早速伝令の使者を遣わし、

農繁期に遅れないよう、兵達を引き揚げさせる

かよいし

と言った。(「漢書」参照)

兵役を解かれた者達は、農繁期に遅れない

ようにと、急いでそれそその家へ帰って

「漢書・後・三」64
600 P

608 P

「漢書・後・三」64
605 P

「漢書・後・三」64
605 P 2所 三國史(第)II-69 地圖 侯官
597 5所 前135年

す、兵一人も死なせず、閼王は罪に伏し、南
この一挙でもって、閼王はほこ一本も折ら
す。子(武帝)の明勅を俟とうというのでありま
ます。自分達自ら(国王を)立てようとせず、天
使者を遣わし、後嗣を申請して参つており
口空虚のままたなつて、閼越国の国王の位が
た。その時から今に至るまで閼越国の国王の位が
若し弟、余善を手引きに謀りごとを遂げま
の三王の軍勢がこそつてこれを攻め、閼王の
に士卒は倦み疲れて、これを攻め、閼王の
へ東冶付近で兵を挙げましたか、す
閼王(郢)は八月に治南(福建)省侯官県
が不明なから、こう記さる。閼王は、
な。漢書に嚴助・朱買臣伝には、
た。

次頁から

610^o
前127年か?
620^o-1/2
600
609^p

626^p-3/2 18行
10月5日
かたしは
次々209
604^o6行
602^o-3/2
278^o
あるいは次々4行



それにしてもどうした訳があって、閼越国は

*

わけ

閼越国

越はご思をこうわりました。云々
とある。へ三国志(四)世界古典文学全集、
筑摩書房、六九頁の中国地図に侯官・東冶
参照
閼越王郢は、へ前一三五年に南越を撃つ
た後のある年(前一二七年甲寅年か)の八
月に治南で兵を挙げ、その直後へ農繁期(稲刈
刈り)直前、弟余善に殺された
という経緯が述べられていいるのかも知れない

611^p

同文 600^p 1/4^分

と想像される。

■そこで、その慣例に従って、

天子に、^{シウケイ}後継者の日^{とくてい}特定指名^{いめい}を行なうて、

ほしいと願^{ねが}い出たのではなからうか。

■つまり、先に^{さき}閼越王^{かんえつおう}が弟某^{おとうとぼう}に殺^{ころ}され、某^{ぼう}が

死罪^{しざい}になり、その民^{たみ}が^{ちやう}宙に浮いたままになっ

た時^{とき}もそうだったのであろうか、

125

水はよろしい。すれは彼らは必ず人質を入水
て藩臣となり、代々貢ぎ物を送って参ります。
かくなれば陛下は、一寸四方の印と、
を吊るす一丈二尺の組紐だけで国外を鎮撫
し、一人の兵も使わず、一本の戟（ほこ）を
も折らずに、思威ならび行なわれることと相

史記 卷(下) 205P 史記 卷(下) 205P
史記 卷(下) 205P 史記 卷(下) 205P
史記 卷(下) 205P 史記 卷(下) 205P

史記 卷(下) 205P

史記 卷(下) 205P

成ります (「漢書」参照)

武帝は、閩越国を長うえさせてやろうと思つた。
「郢や餘善」らは元兇である。一か、無諸
の孫の餘君丑だけは謀議にあずかつていな

越の餘王とし、閩越の先祖の祭祀を奉じさせ
た。(「史記」へ東越列伝)

閩越王郢(兄)を殺した弟の餘善は、自ら
とすれは、餘善の思惑は、完全の外れてい

まつたことになる。
一か、餘善が郢を殺した後、その威令は

閩越の国におこなわれ、民の多くが帰属してい

たので、餘善はみろかに自立して王となつた。
餘王は、勢威が弱く、兄の部下を制御して正

統を維持することができなかつた。
武帝は、そうした状況についての報告を聞いたとき、餘善のため

にふたたび征討の軍を起こそうとせず、
餘善は、一か、郢ととも乱を謀つたが

後には首謀者となつて郢を誅殺した。そのた

め、漢軍は労せずしてすんだのである

史記(漢)下 205^{下中}
東洋史 551
南越

614^P

東越の本拠地不明 ⑥614¹⁹⁵⁷

⑥614¹⁹⁵⁷ 同反⑥611¹⁹⁵⁷ 録王
9¹⁹⁵⁷ 前及6¹⁹⁵⁷

と云った。武帝は、餘善を立てて、東越王に
た。史記に東越列伝を参考し、並立させ
た。武帝の元鼎五年(前112)に、南越が謀
反した。呂嘉ら、南越国の興王の異母兄にあたる建徳
の使者を殺し、興王の異母兄にあたる建徳
を擁立して、漢に反抗したのだ。武帝は、早速、伏波將軍(水上部隊
將官)路博徳、樓船將軍楊僕らが率いる大軍
を送って、南越を攻めさせた。(「東洋史辞
典」創元新社へ南越国)「史記」へ東越列
伝を参照し、このとき東越王餘善は、上書し、
「兵八千人を引きつれ、樓船將軍(楊僕)
に従って呂嘉らを撃ちたい」と願
い出た。(※あるいは、そのような書状を

「ところか」P
⑤ 606P
⑥ 641

590P 577P 588P ⑤ 589P 137P 615P

590P 5/5 ⑤ 590P 1/4 左頁 ⑤ 611P 4行 同文⑤ 594P 1/2
⑤ 613P 1/2 16行 同文 ⑤ 624P 史記+206P 7行 夏津中河見
おとくちの 孫王 ⑤ 611P 4行 同文⑤ 594P 1/2
⑤ 613P 1/2 16行 同文 ⑤ 624P 史記+206P 7行 夏津中河見

五号へ秦の閩中郡に就いて、和田清、五頁参照。
他方、漢は「閩越の」孫王居股を封じ、
領地を与え、その支配者にとり立てて、東成侯とし、
一万户を授けた。つまり、万户侯（一万户を領する
諸侯）に封じた。「史記」へ「東越列伝」参照。
こうして武帝は閩越国を取り潰し、漢の直接支配下の地方とした。
すなわち、前一一〇年頃以降、閩越の地は
中国の治政下に置かれたのだった。（第六章
へ閩越地域の激動の歴史）の項の冒頭にお
いて既述。
か、この閩越国近傍は、すっかり穏やかとなり
平和な時代が続いていった。
なお先に、我が国初代の天皇は、
「前一二七年、もしくは前一一〇四年」
に、東遷を開始したのか、と述べ
た。（第六章へ東遷は何時頃だったのか）の
項末尾において既述。
とはいうものの、前一一〇四年頃、東冶の
地で、そのような契機となる事件が起った。

逢かかなた 616 P 610° 127° 37° 見守った 623° 14° 49°

609° 1/2 8° 778° 670° 6°

と解^{かい}か^かな^なた^たに^に絶^{ぜつ}在^{ざい}す^すと^とい^いう^う洲^{しゅう}島^{とう}へ^へ行^やこ^こう^うと^と

決^{けつ}意^いし^し、東^{とう}遷^{せん}を^を開^{かい}始^しした^た下^下

と^と見^みま^まも^もっ^って^てい^いた^た

不^ふ明^{めい}な^なか^から^らに^に可^かなり^り近^{ちか}い^い所^{ところ}か^から^ら密^{みつ}か^かに^にい^いっ

と^と展^{てん}開^{かい}さ^され^れる^る事^{こと}の^の成^{なり}り^りや^やき^きを^を、一^{いち}帯^{たい}で^で次^{つぎ}か^から^ら次^{つぎ}へ^へ

は^は、都^{みやこ}(東^{とう}治^ちや^や)か^から^ら脱^{だつ}出^{しゅつ}した^た

前^{まえ}一^{いち}二^に七^{しち}年^{ねん}の^の甲^{きのえ}寅^{とら}年^{ねん}に^に、閼^{かん}越^{えつ}王^{おう}郢^{えい}の^の王^{おう}子^し達^{たつ}

そ^そこ^こで^で、こ^この^の物^{もの}語^ごで^では^は、

様^{よう}子^しは^はな^ない^いや^や

山^{さん}宗^{しゅう}神^{じん}

洲^{しゅう}は^は、く^く読^{よみ}み^み

11月5697 辰^{しん}辰^{しん}

④605^{1/2} 119^{1/2} 在位前141^{1/2}前87
 ⑤590^{1/4} 159 ⑥601^{3/2} ⑦648^{1/2} 「さて」P
 新や1-38^{1/2} 1-39^{1/2} 天つき 改行
 ちろく 重複 1458^{1/2} さいご 856^{1/2} 前127年 ちろく 重複 1458^{1/2} 78年
 ⑧609^{1/2} 159 ちろく 重複 1458^{1/2}

東海^{とうかい}の島^{しま}へ
 閩越^{いんえつ}王^{わう}郢^{えい}が弟^{おとうと}餘善^{よぜん}に刺殺^{さつ}された頃^{ころ}（前一二七
 年頃^{ころ}）へ話を戻すことにしよう。（以下、一部重複）
 その当時（前一二七^{1/2}年当時）、日本列島内に
 は、二つの文化圏^{ぶんかけん}があった。
 ①北九州・山口地方を中心とする日箕子^{ひきこ}達の
 文化圏^{ぶんかけん}
 ②中国・近畿地方を中心とする日当初^{ひちよう}の弥生^{やよい}
 人達の文化圏^{ぶんかけん}
 の二つである。（以下、第一・又図、第一・
 二・三表参照）
 この西と東の二つの文化圏^{ぶんかけん}は、水と
 油^{あぶら}のように相反^{あいはん}目^めしあっていた。

さて、日本列島^{にっぽん}を二分^{にぶん}して、西と東の文化^{ぶんか}
 圏^{けん}が互^{たが}いに譲^{ゆず}らず争^{あらそ}っていたころ、九州^{きゅうしゅう}のは
 るか西方^{せいほう}、閩越^{いんえつ}（福建省^{ふくけん}）の地^ちに、漢^{かん}の
 大軍^{だいにん}勢^{せい}を迎^{むか}え撃^うつとうとして、いる者^{ものたち}達^{たち}がいた。
 大^きな漢^{かん}の武帝^{ぶてい}（在位前^{ざい}一四一^{1/2}前八七^{1/2}）の
 軍^{ぐん}と、まさしく一戦^{いっせん}を交^{まじ}えようとしていたのだった。
 大行^{たいこう}（官名^{くわんめい}）王恢^{おうかい}が西方^{せいほう}の豫章^{よしょう}から大農^{だいのう}

⑤590^{1/2} 159
 ⑧609^{1/2} 159

同文
⑤605^p-1/2
149頁

同文
⑤607^p 13~14頁
618^p

史記(史)下205^p
(上)5頁

⑤605^p 169~184
-1/2

つぎを
⑤603^p-1/2
⑤605^p 1頁

わが王(郢)は、ほーいままに兵を發して南越

と謀(はか)つて、こに餘善は、大臣・宗族(血縁の一族)と引いていった。

閩越王郢の弟餘善の顔から、血の気がサツ

ぬ先に、閩王は落命したとある。既述
人嚴助・朱買臣伝に、軍勢すべて集ま
つていたわけではなかつたという。(日漢書に
と)は、いえ、これでもまだ軍勢の全が集ま
うか
と、思うばかりの大軍勢が犇き合つて見えた。

へど、こからこんなに掻き集めてきたのだろ

と、いるわい。下の
時に、郢の弟餘善が、西の麓の方を見おろす

西の方へ向かつた閩越の兵達は、武夷山中の

の兵士達を二手に分けた。西方と北方と

かえ、閩越国へ襲い掛かつていった。大軍を従

魏志倭人傳 44
10482
東治
同文 606P 11行

619P

606P 同文

606P 斗 605P 1/2 同文
史記(下) 205P 上

漢の天子の指令を聞かなかつた。
それ故、天子の兵がわが国の誅討にむか
てゐるのだ。
それにも、漢軍の軍隊は物凄く多い。
たとえいま幸いに勝つたとしても、今後ま
すます多く来襲し、ついにはわが国を滅ぼす
に違ひない。
い、そのこと、王(郢)を殺して天子に謝
罪し、天子が聴き入らうか。
わが国はもとのままに保たれまう。
もしも天子が聴き入らうと一なかったら、
その時初めて力の限り戦ひ、勝てなければ、
海上へ逃すはよいではないか。
一同は言つた。
「ごもつとです」
西の大軍勢に立ち向かう者の達は、こ
に全く正反対の方角、東の口東冶(今の関
侯県付近)を目指して、駆け下つてゐた。
北方ならびに西方へ兵を發して、すつか
り半薄になつてゐた。関越の都口東冶では、
越王郢および王子等が、大勢の女達と共に、

東遷開始の時 45才
元上188P 1か 極3折

620P-1/2

天の行

「それにて」
608

主えい
帰る 512P
英字に帰ること

戦況を案じていた。せんきょうあん
■そんな時、西方の大庾嶺方面に遣わした軍兵た
ちが、^{あめた}慌しく舞い戻ってきた。
●それにしても、帰營した者共の挙動が、とい
ことなく、ぎこちなく、少々おかしい。
■そうして落ち着かない兵等の様子を不審に
思った閼越王郢^{えい}が、
「もーや、餘善の軍に何かあったのか」
と問いたただいたその時、弾かれたよう
に、
「王よ。お覚悟あれ。」
と叫んだ者があつた。
■その声は、他の者達を奮い立たせた。
一斉に抜きはなした剣が、キラリと光つ
た。
■「だが、今となつては、もはやなすすべも無^な
閼越王郢は激怒した。
■「だが、今となつては、もはやなすすべも無^な
ハ逃がすと、謀反人らの前に立ちはだかつた。

601P-3/2
115P
605P-1/2
16P

版 ⑥606 8行

東遷の時 45キとある
紀上 188 59

大 賊徒 反賊 逆賊
本 賊 叛 亂 裏切

⑥606 未刺し殺さした

おうせん元 267
六 戦
敵の攻撃に 17
年 ラコト

史記(漢)下 205 上段 ⑥626 620 - 2/2

照 既述	と 言 っ た と い う 。 「 史 記 」 へ 東 越 列 伝 参	小 は よ い で は な い か し 「 漢 軍 に 勝 て な け れ ば 海 上 へ 逃 亡 す	身 を 伏 せ な か ら 閩 江 を 下 り 海 上 へ 逃 亡 す に よ り 辛 く も 落 ち の び た 王 子 た ち は 船 底 に 裏 切 り 者 共 が 蜂 起 し た 時 父 （ 郢 ） の 嚴 命	近 い と こ ろ に あ る 日 東 冶 は 閩 江 （ 武 夷 山 脈 か ら 東 流	も か か つ て 来 い し 多 勢 に 無 勢 だ う 先 に 戦 ひ な し く
-----------------	--	---	--	---	--

（木）

うか
「御無事かどうか、私が都の様子を窺って
まいりましよう」
■侍者の一人が夜陰に紛れて都の内へ忍び込
み、気配の分かった知己に問うと、
「王は無念にも、卑劣な者共に刺し殺さ
れてしまわれました。
いかも嘆かわしいこと、逆賊たちは、
の頭を奉じて、西方の大行王帳のもとへと
向かったのです。」

トル
■かなりうかつな見え方をすれば、この話
は「――！――！餘善加実際にそう言ったのかどう
かはさておき、
へ過去に幾度も、海上への逃亡を図った者
達かいた」
という事実を反映しているのかも知れな
い。
■閩江下流域に浮かぶ小島に身を寄せた王子
達の面々、不安の色が募っていった。
「父上は、いまごろどうしておいでであろ
うか」

606^P
18~19行

175

④613^{1/2} 元封元年(前110年)
天の報い 近きかな

④611^{3/4} 行 見執っていた ④616^{8/9}
無諸の孫の孫王と 623^P

子337
流環 2339^P

いはば
船端 1956^P

へ 天の報いとでもいうのであろう

東越王餘善は、	並らび立った。	の祭祀を奉じ、	一海をへだてた	成り行きを見守った。	王太子達は、	ではなかうか。	打って出よう	に点在する島々	東冶の対岸の	定かでない	流浪の幾年月	たはただぐたり	すつかり	追手の影に怯え	
武帝の元封元年	(父王郢を刺殺した弟)	(無諸の孫)	(父王郢を刺殺した弟)	(無諸の孫)	のたよりに耳を澄ませ、	のたよりに耳を澄ませ、	ひたすら待ち構えていた	時折り身を潜め、	太伯の後と自称する者等は	矢のよう	か、矢のよう	懐かしく聞越の山々に見入っていた。	放バいたように船端にも	まいった者達は、	毎日が続いた。
の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に	の冬に

居所を移してマソと

626^{1/2} 4^{1/2} 余

639¹ 東

59^{1/2} 15^{1/2} タイム 617¹ 1^{1/2} 東海の島へ
624¹ 104年 589¹ 1^{1/2}

史記(下) 205¹

615¹ 同文 2^{1/2} 3^{1/2}

610¹ 5^{1/2}
614¹ 8^{1/2} 餘善を殺し
(OK)

漢軍と戦って、いり最中、
く、部下らに、暗殺さ
さ、らに、その後、漢は、
を封じ、領地を与え、その支配者に、
て、東成侯と、一万户を授けたと聞いた。
こうして、閼越の地は、名実ともに漢の領
有するところとなったのだ。
この不本意な結末は、郢の王子らのつけ入
る機会が、完全に封じられたことを意味していた。
ある日、王子達のうちの誰かが、こう呟いた。
*「それは、もーかーたら、前104年ころ
だったかも知れない(第3表参照)」
「我等は、一体どうすればよいのだろうか」
「すると、先程から東の方角のあなたを食
入るよう、疑視していた長兄が、こう言った。
「実は余も、そのことをずっと考え続けて
いたのだが、我々は、これから東へ向
かうべきだと思ふ」
「東へ向かう、ですって」
「どうしてなのですか」

617¹ 2^{1/2} 羊鍾善
は、M.
は、あ、おな

楠 625 紀上189°
あやま 青山 紀上181°

西の編 紀上188° 625P

ひきか 井上175°
「開き」とある 大カニ2350°
紀上188°

小林1020°
開き 175°42' 紀上188°
紀上188° にては変

注目 凝視 前頁16行

●弟達 は、長兄のあまりの唐突な言葉に驚き
あやーむのだった。
■長兄は、弟達の注目の只中(に)あつて、暫く
押(お)黙(だま)つていたが、―――やかて、自分自身
言(い)い聞(き)かせるかのよう(に)、こう語(か)つた。
「むかし、わが天祖(あまつみそ)の太伯(たいはく)は、天のいづく
らを隣(りん)き(へ)退(ひ)け捨(す)てて、雲路(うんろ)をおーわけ、
江南(こうなん)の地(ち)へ降臨(かうりん)された。
当時(とうじ)、イノイノこの世(よ)はまだ野蕃(やばん)で草昧(そうまい)だつた。我(われ)が祖(そ)太伯(たいはく)は、その蒙昧(もうまい)の中(なか)にありながら
も、自(みづか)ら正(ただ)しい道(みち)を養(やしな)ひ、日(ひ)に向(む)かう西(さい)の偏(へん)
(江南(こうなん)の地(ち))を治(おさ)めうけた。
それ以(もつ)降(くだ)り、わが祖(そ)と父(ちち)の尊(みこと)が、神(かみ)ひじりの
ように徳(とく)高く善政(ぜんせい)を重ねた結果(けつこ)、恩沢(おんたく)も行(ゆ)き
とどき、かくて年(ね)月(げつ)が経(た)過(か)した。
―――と二(ふた)ろで、塩土(しほつち)老翁(らうおう)に聞(き)いた(こと)だ
が、こんな話を―――してくれたで
日(ひ)東(あづま)の方(ほう)に美(うつく)しい地(ち)があつて、その四(よ)周(しゅう)を
青山(あおやま)かぐりりと巡(めぐ)つて、天(あま)磐(いは)杵(き)象(さう)を
樟(け)船(ふね)の(楠(くすのき)の大木(たいぼく)で造(つく)つた船(ふね))に乗り、その美(うつく)し

おとう
おき 爺1軒

626⁰

紀上209^P に至はやひ ⑤ 600^P 14軒
⑥ 744^P

たいきお ね1331^P
大業 大なる事業

紀上189^P 2軒
紀上554^P

い 地のなかへ飛び降りていった者が有る

という。

余が考えるに、

業をひろめ、天下に君臨するのには、国家統治の大

いところで、恐れなく、国の中本に位置して

るのであろう。

そして、天から楠の船に乗って飛び降り

た者というのは、多分、饒速日（物部氏

の祖）なのだろう。

私は、―――東海のかなたに浮かぶその

美しい地へ行って、都を営もうと思うかどうか

だろうかと

弟達は、始めのうちこそ果敢と聞いて

か、しかし、兄の決意が非常に固いのを見て

とると

「たいう理にかなったお話です。さっそ

く実行なさるがよろしいやうございます」

と言った。（神武即位前紀参照）

(*)

610^p
 615^p 紀上190^p 八月に治部で兵を挙げた。
 *秋 608^p-1/2 611^p

627^p

617^p
 620^p 前127年 皇太子御 皇子誕生
 前104年 東征開始
 23年
 紀上188^p

神武即位 530^p 60^p 530^p 45^p
 471^p 1 486^p 1

確証はないが、 甲寅年^{きんねん} 十月五日であつたし	神武即位前紀によれば、 太子^{みこ}たち^{たち}が東征の途についたのは、太歳^{たいさい}	神武即位前紀によれば、 太子^{みこ}たち^{たち}が東征の途についたのは、太歳^{たいさい}	知れない。 年^{とし}に^につ^ついては慎重に見極めてゆかなければならぬ。 日本書紀に全編にわたって、	四十五歳と称してゐるのかも 四十五歳と称してゐるのかも 四十五歳と称してゐるのかも 四十五歳と称してゐるのかも	神武天皇は、この時（東征を開始した時） 四十五歳であつたし 神武天皇は、この時（東征を開始した時）	トル ところ、神武即位前紀に「
--	---	---	---	---	--	---

④608^p 前127年の八月に治南候 ⑤610^p 65斤
 稻の刈入水 ⑥608^p - 1/2 65斤 80
 ⑦608^p - 3/2
 ⑧589^p 49斤 ~ 59斤 前127年8月
 10月

一切合切也

628⁷

指

$$\begin{array}{r} \text{---} 12/3 \\ 12/3 \end{array}$$

お
く
こ
と
に
し
よう

Q

船ふねが、東ひがしになみ広ひろがる大おお海うみ原はらを漂ただよつて、
 波なみや風かぜに、その命いのち運いんの全すべてを委まかせて、
 太たい伯はくの後のちと自い称しょうする者もの達たちの乗のる

る。第六章 東遷は何時頃か？ たのか？ の頃の末尾参照
倭人率^{わいじん}は、希望^{きぼう}と不安^{ふあん}と加^く入^いりまいた。面^{めん}
持ち^{もち}で、船首^{せんしゅ}が指^さし示^ししてゐる方角^{ほうかく}を、いっ
と見^みつめていたに違^{ちが}ひない。

② 予^{のち}て今^{いま}（前^{まえ}一〇四年の十月五日）^下太伯^{たはく}
 の後^{のち}と自^い称^{けい}する者^{もの}達^{たち}は、
 目^め差^さして漕^こぎ出^だした^下

① 皇^み子^こたち^は、
越^この都^{みやこ}東^{とう}冶^やから脱^{だつ}出^{しゅつ}した。
(既^い述^{じゆつ}) 八月^{はちがつ}に

行方 実施
629P

百科第26-520
新史年 622

前156 1才 前156 1才 前141年
141 16才 前87 前87 前87
15 15 69年 54年
前590-1/4 69年 150前149

漢の武帝
中国史上著名な漢の武帝が為に勝った
事績等について、その概要を述べてみたい。
前漢第七代の武帝（前156-前87）
在位年数は前141-前87までの54年間
に、およぶは、前141-前87までの54年間
武帝は、中央集権的な郡県制度を全面的に
実施して、漢帝国の基礎を固めた。
すなわち、封建諸国の勢力を弱める一方、
新官僚登用の道をひらき、儒教を国教と定め
て、専制権力の思想的支柱とし、また大規模な
水利灌漑事業を行なうなど、着々と専制君主
権を確立していった。
このように国内の充実に押し進めただけで
なく、対外的にも、父祖以来の消極策
と違い、積極的侵略政策を取った。
武帝は、日月氏（秦漢時代に中央アジア
で活躍した民族）と結んで、
東西から匈奴を挟撃する計画
を遂げた。

H21(2009)11.8
129(2017)12.27~28(3回)
430(2018)12.5(4)~12.6(4回)
2元(2019)5.4(4)~5.5(3回)
2(2020)7.28(4)
~8.2(4回)

6157 前110年ころ以降
630P
大月氏(大月氏) 大月氏(大月氏)
匈奴(匈奴) 匈奴(匈奴)
西域(西域) 西域(西域)
大月氏(大月氏) 大月氏(大月氏)
匈奴(匈奴) 匈奴(匈奴)
西域(西域) 西域(西域)

東洋史行 622
侵略
画計略

1/2
7/29

(*)

159

百 科 事 典
大 月 氏
衛 青
霍 去 病
武帝
参 照
東 洋 史 辞 典
創 元 新 社
武 帝
世 界 大
後 世 の 専 制 国 家
に 粟 狼
半 島 へ 出 兵
支 配 下
武 帝 は
南 越
閩 越
貴 州
雲 南
開 拓 成 功
匈 奴 の 勢 力
将 軍 衛 青
霍 去 病
武 帝 の 西 方 侵 略
意 欲
同 時 に
武 帝 の 西 方 侵 略
意 欲
運 転
こ う し て
本 格 的 な 西 方
交 通 開 始
西 域 諸 国 の 状 況
詳 し く 中 国
交 通 開 始
そ の 画 策 は 失 敗
大 月 氏 国
派 遣
を た て 張 騫 を 大 月 氏 国
派 遣
し た